

奈良町には「ゲストハウス」と呼ばれる安宿が相次いで誕生している。

北京終町の「町屋ゲスト

トハウスならまち」もその

一つ。築80年超の大正浪漫

な町家を改装。中庭やお蔵も

あり、外国人にも人気だ。

1階のロビーは旅行者や地

元民の交流の場となってい

る。

オーナーは「シャープ」を

定年退職した技術者の安西俊

樹さん。退職金をつぎ込んで、

2009年暮れに開業した。

以来、世界50カ国(！)から

お客さんが訪れている。

先日は、南米のコロンビア



寮 美千子

ならまち暮らし

草の根外交

から日本語学校の学生4人と引率の先生が泊りに来た。1カ月半の日本縦断の旅を、自分たちで計画して安宿を泊まり歩いているという。先生のニンフェルさんは、日本語もペラペラの美女だ。

そのご一行様を、ひよんな事から、奈良漆の樽井禧酔師の工房にご案内することになった。奈良では、正倉院の御物の漆の技術を明治期に復活。美しい螺鈿漆器を、当時の技法のままに、いまも作っているのだ。

樽井師の説明に、学生たちは真剣に聞き入り、最後には感激の涙さえ浮かべていた。日本の古い伝統、その深部に直接触れたことが、彼らの心に大きな印象を残した。

その後、未成年の諸君にはお留守番をしてもらって、みんなで近所の立ち飲み屋へ。ブルーカラーのおじさんたちが珍しがって、どんどんおごってくれ、話しかけてくる。店はすっかりラテンのノリの大にぎわいに。

コロンビアがどこにあるか、いままで気にもしていなかったのに、急に身近に感じられるようになった。内戦の



奈良漆の樽井禧酔師の工房を訪れたコロンビアの人々

続く国だが、平和になってほしいと心底思うし、コロンビア相手には、絶対に戦争などしたくないと思う。

人々が交流をして心を交わすこと。それが平和の礎、草の根外交だ。あちらも、奈良を忘れないだろう。ただ通り過ぎて見物するだけの観光ではなく、町の人々と観光客が交流できる「場」こそが、いま、必要なのではないか。この町に、真の豊かさをもたらすのは「高級ホテル」などではないと確信した。

(作家・詩人)

|| 次回は2月9日に掲載します。